

オーストラリアにおける語用論の動向*
The Current Trend of Pragmatics Studies in Australia

高司 正夫

オーストラリアには語用論学会はなく、語用論に関する研究の発表は主としてオーストラリア言語学会 (Australian Linguistic Society) においてなされている。Anna Wierzbicka (Australian National University) によれば、オーストラリアにおいては、語用論の研究はそれほど活況を呈しているわけではなく、語用論を専門としている研究者も数少ないという。Wierzbicka 自身も、広く知られているように、意味論と語用論の 2 つの分野の学者である。生成文法はオーストラリアでは等閑視されており、統語論と銘打った研究もあまり盛んではないと聞く。この国の言語研究の中心は、(筆者が visiting fellow として在籍している) Australian National University の図書館で調べたかぎり、意味論／形態論／応用言語学／音声学であるように思われる。以上の状況を踏まえて、標題の趣旨に沿うべく筆を進めて行くことを、まず、お断りしておきたい。

オーストラリアにおける最新の語用論の動向をうかがうという意味で、2001 年度オーストラリア言語学会大会で発表された語用論の、および、語用論にかかわる研究を見てみることにしよう。学会大会は 9 月 27 日～30 日の 4 日間 Australian National University で開催された (参加者は国内外からの約 150 名だったが、国内の航空会社 Ansett の経営不振で欠航があいついだため例年よりも少なかったという)。研究発表の件数は全部で 64 件、そのうち語用論関係のものは下の (1)～(4) に挙げてある 4 件のみで、その他の 60 件は意味論／比較・対照言語学／応用言語学に関するものであった (以下の発表の要旨は大会プログラムおよびハンドアウトを参考にした)。

1. Georginia Heydon: Establishing the structure of police evidentiary interviews with suspects

相互行為における語り (talk) の分析対象として、警察の容疑者取り調べ (発

*I express my sincere appreciation to Anna Wierzbicka and Brigit Maher, at the Australian National University, for help which has made this article possible.

表の英語では、interview) という制度的やり取りを取り上げている。オーストラリアのある地方の警察署で行われた、容疑者に対する「問答無用の」取り調べの相互行為が、参与者の役割という視点から、分析されている。取り調べのやり取りで、警察の権威を取りつくろうとする言語行為が特徴的である。

2. Giao Quynh Tran: Pragmatic discourse transfer in second language acquisition

ポライトネスの視点からヴェトナム語母語話者の英語学習の問題を検討した研究である。フィールドワークの結果、自国の社会的／文化的ポライトネスの規範が彼らの英語習得の大きな妨げとなっていることが明らかになった。著者は英語母語話者の相互行為における語用論的基本ルールを学ぶことが必要であると主張する。(この研究においてはヴェトナム移民に対する英語教育が下地になっている。)

3. Kerry Mullan: How the French engaged: An analysis of French interactional style

Mullan はフランス語の相互行為において (1) 密着 (かかわり)、(2) 協調と対立、(3) 自己主張の3点が支柱であることを幅広いデータに基づいて実証する。さらに、妨げ／重なり／不一致は近接を示すことを明らかにする。

4. Radu Daniliuc: Discovering the meaning in Puns

関連性理論の枠組みによってパンの意味を探索する試みである。(1) the resolution and recall principle、(2) the information structure principle、(3) the principle of successful communication の原理に則って、パンがどのように首尾よく解釈されるか、その仕組みが綿密に考察されている。

上の学会発表について特徴的に言えることは、1つに、語用論の根幹に関する理論的議論は皆無で、全て、既成の理論的枠組みを援用した応用的研究であるということである。2つ目の特徴は異文化／異言語間の研究が主であるということである(他の分野の発表も軌を1つにしている)。筆者は上の4つの発表を聞いたが、質疑応答はいずれも応用的側面のものばかりで、理論的側面に関する丁丁発止の議論はついぞ聞かれなかった。

このような分野の研究ですぐれた成果をあげている Cliff Goddard (University of New England) の2つの研究を、ここで紹介したい。

5. The meaning of *LAH*: Understanding "EMPHASIS" in Malay (Bahasa Melayu) (*Oceanic Linguistics*, Volume 33, No.1, 1994)

著者はマレー語の *lah* を発語内行為的助詞として捉え、それが使用において果たす語用論的機能を考察している。すなわち、*lah* は感嘆／命令／連帯の言語行為を補完する役割をになうということである。

6. Cultural values and 'cultural scripts' of Malay (Bahasa Melayu) (*Journal of Pragmatics* 27, 1997)

マレー語の発話規則、および、その発話規則と社会の文化的価値観との関連性を cultural scripts 理論を用いて考察し、マレー語の使用を、言語の普遍的原理に照らし合わせて吟味する。(cultural scripts 理論は Anna Wierzbicka: 'Cultural Scripts': A New Approach to the Study of Cross-cultural Communication. *Pütz*, 1994 に詳しい。)

Oceanic Linguistics に過去 10 年間掲載された論文に目を通して見たが、語用論の、あるいは、語用論にかかわる論文は上の (5) に挙げた Goddard のもの以外は見当たらない。他の全ての論文はオセアニア地域の諸言語を取り扱ったものである。たとえば、2000 年度の同誌 (Volume 39, No.2) には次の 2 つの論文が含まれている: Catharina van Klinken: From Verb to Coordinator in Tetun / Robert Blust: Low-Vowel Fronting in Northern Sarawak.

オーストラリア言語学会誌 *Australian Journal of Linguistics* を過去 10 年間さかのぼって調べてみると、語用論の論文は、これまた、皆無であった。ただ、唯一、2001 年の学会誌において下の (7) の論文が議論の中で語用論を取り扱っている。

7. Shigeko Nariyama: Argument Structure as Another Reference-tracking System with Reference to Ellipsis (Volume 21, No.1, 2001)

この論文は Foley and Valin(1984)の「指示の探索」理論に基づいて日本語の Ellipsis を分析している。著者は日本語は指示の解釈において pragmatic inference の体系のみにとどまらず、switch-function, switch-reference, noun class の体系も同様に用いられていることを論証し、Foley and Valin が主張する「指示の探索」理論の普遍性に反例を挙げて、異を唱える。

参考までに、この号の学会誌に掲載されている他の分野の論文を見てみることにしよう。

8. Michael C. Ewing: Reference and Recovery in Cirebon Javanese
9. Dwi Noverini Djenar: Indonesian "Locative" Pronouns: Deictic or Anaphoric?
10. Keith Allan: From *a* to *the*
11. Peter K. Austin: Zero Arguments in Jiwarli, Western Australia
12. Gerrit J. Dimmendaal: Logophoric Marking and Represented Speech in African Languages as Evidential Hedging Strategies
13. Tania Strahan: The Distribution of Reflexive Pronouns in Norwegian

1980年代の *Australian Journal of Linguistics* のページをめくってみると、語用論の論文は下の(14)の論文1件のみである。このような現実を目の当たりにすると、冒頭の Wierzbicka の言葉が真実味を帯びてくる。

14. Janet Holmes: OF COURSE: A Pragmatic Particle in New Zealand Women's and Men's Speech (Volume 8, No.1, 1988)

New Zealand において、of course を、(1) 男性は女性よりも intensifier や booster として用いる傾向が強い、(2) 女性は男性よりも連帯と共有価値観を強調する積極的ポライトネスの機能として用いる、(3) 女性は、将来、内緒話に用いる傾向を示すだろう、という3点を論証している。

前述の Anna Wierzbicka は意味論および語用論の分野ですぐれた研究業績をあげている世界的に著名な学者であることは広く知られているが、オーストラリアにおいては言語学界の重鎮として指導的立場にある。彼女の語用論にかかわる数多くの業績の中から4点を選んで、それらを見てみることにしよう。

15. *Cross-Cultural Pragmatics. The Semantics of Human Interaction.*

(Mouton de Gruyter: Berlin · New York, 1991)

本書は意味論の視点から異文化／異言語における相互行為を考察している。特に、異言語間の類似性と相違を semantic metalanguage によって説明する試み

は異彩を放っている。本書に、語用論と意味論を統一しようとする著者の意図が読み取れる。(Cross-Cultural Pragmatics という用語は Wierzbicka によるものと思われる。)

16. *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and Universals*
(Cambridge University Press, 1999)

著者は感情を6つの範疇、すなわち、(1) something good happened (e.g. *joy* or *being happy*), (2) something bad happened (e.g. *sadness* or *grief*), (3) something bad can/will happen (e.g. *fear* or *anxiety*), (4) I don't want things like this to happen (e.g. *anger* or *indignation*), (5) thinking about ourselves (e.g. *envy* or *Schadenfreude*), (6) thinking about ourselves (e.g. *shame* or *remorse*)に区分けし、それらの感情領域が異言語／異文化に顕在する様態を cognitive scenario という概念を用いて詳らかにする。異言語／異文化に見られる感情の普遍性と相違が顔面表情／身体表現／言語使用の視点から明らかにされている。

17. *What Did Jesus Mean?* (Oxford University Press: New York, 2001)

本書は conceptual primes の原理を用いてキリストの言葉とパラブルに旧套を脱する斬新な解釈を施している。その解釈にかかわる叡智は、ひとつ、キリスト教の世界の観念を照らすにとどまらず、あまねく普遍的人間精神の深淵にも光を当てる。著者は(1) 私たちは宗教の如何を問わず共通の精神的はたらきに基づいて意志の伝達を行っている、(2) キリストの叡智は人間の言語行動の普遍的原理を探求する上で重要な意味をもつ、と説く。

18. Australian cultural scripts – *bloody* revised (*Journal of Pragmatics*, in print)

著者は、*bloody* を、オーストラリアの文化を象徴する言葉の1つとして捉え、その使用を cultural scripts 理論によって分析している。*bloody* に見られる文化固有の使用が人間の普遍的コミュニケーションの原理へと収斂する過程が詳細に考察されている。(オーストラリアのテレビで、実際、*bloody* という語が頻繁に聞かれる。)

下の論文は3つの英語の単語を意味論から考察したものであるが、使用／コンテキストの側面にも深い洞察が加えられている。

19. Catherine Travis: *Kind, Considerate, Thoughtful: A Semantic Analysis*
(Lexikos 7, 1997)

肯定的特性をもつ kind, considerate, thoughtful の 3 つの語は似て非なるところがある。使用において、これらの語はお互い織り込まれて繊細微妙な相違と類似性をあやどる。これらの相違／類似性は豊富なデータに基づいた分析によって明確になる。著者はこの研究成果を異言語／異文化間コミュニケーションに資するものと位置づける。

最後に、新進気鋭の研究者 Brigid Maher (Australian National University) の論文を紹介したい。この論文は Honours Thesis を受賞している。

20. *Le gabbiette* or The Caged Concepts of Human Thought: An Italian version of the Natural Semantic Metalanguage (unpublished, 2000)

Maher は、Wierzbicka その他が開発した Natural Semantic Metalanguage (NSM) が普遍的原理であることを指示する立場に立って、イタリア語の the primes of the NSM lexicon に錘鉛を降ろして考察を加え、さらに豊富なデータを駆使しつつ、意味論と語用論の視点から、有標、語順、代名詞、および時制を吟味する。この考察と吟味から十二分に満足のゆく結果が得られ、NSM 理論はイタリア語に、大略、適応することが証明された。(primes の概念は Anna Wierzbicka: *Semantics. Primes and Universals*. Oxford University Press, 1996 に詳しい。)

これまで見てきたように、オーストラリアの語用論の研究はそれほど盛況であるとは言えない。しかし、あえてその特徴を挙げれば、大略、以下のようなものになると思われる。

- (a) 語用論の根幹にかかわる理論的議論よりも応用／実用的研究が主である。
(ただし、Wierzbicka や Goddard のように culture-specific norms から human cognition へと普遍性を探求する研究者が 1 部にいることも付記しておかねばならない)。
- (b) オーストラリアの地理的事情から、異言語／異文化間の研究や地域的な研究に志向的である。(他の分野についても同様のことが言える。)

(c) 語用論は perspective と捉えられている。

以上の特徴は筆者の短期間の調査に基づいたもので、あるいは、いささか異なった捉え方があるかもしれない。しかし、これらの特徴は実際と宵壤の違いはないものと感じる。